通俗正教
傳道小書

敬神略話

年十百九千生降 ✦ 年三十四

264

200

020610-000-0

特17-92

敬神略話

水島　行楊／著

M43

ABI-0425

通俗正教傳道小書

敬神略話

『主爾ノ上帝ヲ拜セヨ、獨リ彼ノミニ事ヘヨ』（マトフェイ、四ノ十）。

7.4

茲に敬神と題しましたが、此は神様を敬ふとである』と申しますれば、只漢語を日本固有の語に言換へたばかりであります。其神様を敬ふとは、何の事ですか、其は『神様を拜むことです』と答へましやうか。此れも語を言換るばかりです。そこで少し詳しく説明しますと、上帝を敬ひ、若くは拜むとは、『我らが天地の主宰たる上帝乃ち天の父を尊んで如何にも其ありがたいことを認め心から形に表で虔みを彰はす所の清き行爲』であります。之を宗教上の用語で申すと『敬虔なる役事』であります。此上帝を拜むといふ眞の意味を調べるには聖書中救世主とサマリ

ヤの婦人の問答からお話し申しましやう。乃ち救世主イヽス、ハリストスはある時傳教の旅行の御都合で、イウデヤからサマリヤのシヘムといふ町においでになりました。此町はガリジン山と其他の山の間に在て、其頃はイウデヤ人からシハリと呼做れてありました。而して此町外れの南の方に一つの深い井が有て、其は昔からの傳に太祖イアコフが掘て遺されたといふことで、イウデヤ人は勿論サマリヤ人まで此井を大切にしてをりました。

時は十一二月頃の日中で、彼地方では隨分熱かッた所に、主イヽス、ハリストズは、旅の疲れで此井の傍に休まれました。其時もはや午餐の時分でしたから御門徒たちは食物を買ふ爲に町に出て行きました。時に一人サマリヤの婦人は、水汲の爲に茲に來ました。そこで主は此婦に向ッて『我ニ飲マシメヨ、』即ち余に其水を一杯飲ましてくれ』と仰せられました。所が其婦はおどろいて『爾ハイウデヤ人タルニ、如何ニシテ我サマリヤノ婦ニ飲ムヲ求ムルカ、』――『あなたはお見かけ申した所がイウデヤのお方でありましやう、それにどうしてサマリヤの者なる私に飲むことをお求めになりますか』と申上げました。此はイウデヤ人とサマリヤ人とは平生大變仲が惡くて、とても飲食を共にするどころか、彼は此にちよッと觸るとさへしなかッたからでありますこの樣なことは畏き主であれば、とくに御承知のことでした。其に今わざ〳〵サマリヤの婦人に水をお求めになッた主の御意は、外ではない、之を以て靈魂の恵みの水即ち上帝聖神の恩寵のことを悟らせうとするいとありがたいみこゝろでした。ゆゑに主はすぐに答へて『若シ爾ハ上帝ノ賜ヘヽ及ビ我ニ飲マシメヨト、爾ニ言フ者ノ誰タルヲ知ラバ、爾ハ自ラ彼ニ求メン、而シテ彼ハ爾ニ活ケル水ヲ與ヘン、』――『お前は若しも今余に飲ましてくれといふた者が誰であるといふことを知たならば、反ッてお前の方から對手に願ふ樣になる、さうすると對手はお前に活た水を飲ましてくれる』と仰せられましたこの之を聞て婦人は、まだ形の水のことと思ふてゐましたから、ふし

ざそうに問返して『主ヨ、爾ニ汲ム器ナク、井モ亦深シ、然ラバ何レヨリ爾ニ活ケル水アルカ……』『主よ、あなたは、水を汲む器もなく井もなかなか深い、其にどこから其活た水を汲むことができますか、あなたはどうして我らの太祖イアコブよりもまさったお方でしやうか』と申しました。そこで主は再び答へて『凡ソ此ノ水ヲ飲ム者ハ復渇カン、然レドモ我ガ與ヘントスル水ヲ飲ム者ハ世々ニ渇カザラン……』――『凡そ此水を飲む者はまた渇く、けれども余があたへる水を飲むものは永く渇くことがない』と仰せられました。此はこの世の物事は幾らおもしろくても遂に眞の滿足を與へる者ではない、只上帝の敎を聞て、聖神の恩寵を受けることだけが人の靈魂を淨めて眞の滿足をあたへるといふいみであります。

婦人の心には、まだ分り憎い樣でしたが、主が全知の眼を以て彼婦がこれまで行ふてをつた身の上のことなど悉く透視して全く間違なく言當てられた者ですから

此には合はぬで、彼婦は非常に驚いて、主イヽス、ハリストスを以て預言者であると思ひました。果して預言者なれば、我々サマリヤ人とイウデヤ人の間に古來長く蟠ツてをる一大問題を解決してもらひたいと、かう思ふてかの婦は其井のかなたに見ゆるガリジン山を指しつゝ主に向ひ『私らの先祖は此山で上帝を拜んでゐましたのに、あなたがたの方ではイエルサリムでなくてはならぬと申されますが此はどちらが善いのでしやうか』と質問をかけました。なるほど此は從來なかなかやかましい問題で、從前サマリヤ人がガリジン山にたてた聖堂はイウデヤ人の爲に打碎されてしまふた樣な次第でした。けれども どちらも聖書の字句に拘泥で眞實に上帝を拜む意が分らぬ所から、こんな爭ひもでゝきたのです。そこで睿智の主は、此二つについての訴へには、敢て直接に勝敗の決定を下されないで、尙拜むといふ眞意の至高尙な所に彼婦どもの心を引上げうと思召して、至嚴かに『婦ヨ、我ヲ信ゼヨ、此ノ山ニ非ズ、イエルサリムニモ非ズシテ父ヲ拜セン時ハ來

ル……。眞ノ禮拜者ハ神ヲ以テ眞ヲ以テ父ヲ拜セン、蓋シ父ハ是ノ如ク彼ヲ拜スル者ヲ覓ム、上帝ハ神ナリ、彼ヲ拜スル者ハ神ヲ以テ眞ヲ以テ拜スベシ、』――『婦よ余を信仰せよ、此山でもなく、又イエルサリムでもなくして父を拜むべき時が來る……眞の禮拜者は神と眞を以て父を拜む時が來る、今はもはや其時である、其は父は此樣にして拜む者を求め給ふ、上帝は神である、故に之を拜むものも亦神と眞を以て拜むべきである』と仰せられました。此預想外な非常なお言に依て、先に主を預言者と信じた婦人の心は、更に信仰と疑ひの間に彷徨ふて終に「メッシヤ」即ちハリストス救世主のことに思ひ及ぼしました。そこで婦人は主に向ツて『メッシヤがおいでになッたならば、萬事をお告げになッて今私の彷徨ふてをる此疑ひも分明と決定でありましやう』と申上げたのは、實に憫れな者でありました。今自分の目の前に在る者こそ疑ひもなくメッシヤ即ちハリストスであるといふことは知らずに。併し何人でも主聖神の恩寵に照されない以前の

靈魂の有樣は、此樣な暗途に在たのです。けれども感心なことには此婦がメッシヤに付ての思想は、他のイウデヤ人ほど壞傷でをりませんでした。故に主は特別に此婦に明して『是レ我、爾ト語ル者ナリ、』『今お前と話してをる余は其（ハリストス）である』と仰せられました。主のお言を聞て此に至れば、婦人はもはや靈魂の中は燃立つ樣な思念と象ることもできぬ喜びの情にたへない樣に、其持て來た水瓶をそこに置たまゝ走て町にゆきました、而して町の人人に『お前らも往てあの人を御覽なされ、其はこれまで私が行たことをすッかり知て私に話した人でありますまし、是こそハリストスではありませんか』と申した者ですから、おほせいの人人は、それを見る爲に、イアコフの井の傍まで往きました、而して其が果して世の救主ハリストスであるといふことをさとッて、之を信じたものが多かッたといふことでございます。即ちハリストス救世主を信じて、天の父なる眞の上帝を拜む樣になッた者が澤山あッたと云ふことです（以上イガアン四の三から、冊まで、及び四十一に詳。）。

是の一番初に掲げました聖書の言は、主即ち我ら人間の主たる上帝を拜み、只是の眞の上帝にばかり事へよと云ふ上帝の命令でありまして、此は人間が上帝に於けるの關係と最も緊要重大なる本分を示された者であります。尚此事は、後にお話し申しましやう。念の爲未信者のお方に申上ておきますが茲にハリストス救世主と天の父と申すのは、決して二つ別々の上帝ではありません。眞の上帝は固り惟一です、けれども三位一性と申して、父と子と聖神の三つの位があります、此中の子と申すが、ハリストス救世主でして、父と申すのは此三位の上帝を總稱して呼ぶ時もあります、又特に父の一位のみを呼ぶこともあります。而して此の父と子は固り一性一體で、分れるとの出來ない上帝、聖神も同樣分れたりはなれたりするとのない惟一の上帝であります。

以上は聖福音の中から上帝救世主とサマリヤの婦と井端でのお話に基いて申述べたのですが、世の中の井端會議の問題と申せば、先づおさんがだんなの批評から

おかみさんの蔭口、近所の花嫁の月旦めから隣店の若い衆の顏が何斯の問題ぐらゐが落ちですが、さてもサマリヤの井端問題は實に善美な者でした。どうか諸君浮世の汚れから耳を洗ふて、此全世界に關はる神聖問題に暫く心を向けて御覽なさい。そも斯地の井からは我らの身體に必要な水を汲取ることができる樣に、以上に見えた上帝救世主のお言からは我らの靈魂になくてならぬ生命の水を汲取ることができます。斯世の地上に一寸溜ッた濁ッた泥水でなく、天上のいと清き水なる上帝の敎を汲取てよく味ふことができる樣になるのには、何うしたら宜しいか。充分きれいに見ゆる水道の水にも時としては蛭や其他の蟲が出るといふ話もあッた、けれども聖なる上帝の降し給ふ聖なる水に、みじんの不聖もある筈はない。至聖き上帝の敎は、至淨き者、至潔よき聖神の恩寵は、いと潔き賜であるといふことは、申すまでもない明かな道理である。それで我ら人間は、どうでも此上帝樣について其尊い敎を悟り、其ありがたいお蔭をうける樣

に勉めなければなりません。それには何うしてよいか、今少し其とを申しましやう。廣い世界には、いろ〳〵な人物が有て『余は幾ら聽ても上帝の教が分らぬ』とか『余は隨分上帝を拜んでをるけれども、一向其御利益がない』とかいふてこぼす方もありますが、其は御當人が自分で分る樣な方法を務めないからわからぬのです、又折角上帝を拜んでもまるで其いみを取違へてをるから利益がないのです。上帝の教が正當に分る方法は爰に大教師イエスキリストがサマリヤの婦に仰せられたお言の中に著るしく見えてをります『婦ヨ、我ヲ信ゼヨ』――『婦よ、余を信仰せよ』と、即ち活た水なる上帝の教を汲取るに、一ばんに必要な釣瓶は信仰でありました生徒は親切な教師を信ぜずしてどうして學業を受けることができますか、人民は至尊なる主權者を信ぜずしてどうして其保護を戴くことができますか。其と同じ道理で、上帝につき、上帝の教をさとる爲には、何よりきさに正直な信仰の心が必要である。故に主イエスキリストは此から至高

尙な眞理を訓へ給はらうとする前に斯く嚴かに信仰を求められたのです。さて疑ひなく、心を靜めてきけば、なるほど主のお言は、一點の非難すべき所もない眞理である。『此ノ山ニモ非ズ、イエルサリムニモ非ズシテ父ヲ拜セン時ハ來ル』――『此山でもなく、又イエルサリムでもなくして父を拜むべき時が來る……』と。如何にも此は公平な道理です、彼サマリヤ人が思ふてゐた樣にどうでもガリジン山でなくては上帝に公祈禱を捧げることができないとか、又イウデヤ人が唱へてをつた樣に奉神禮を行ふのはイエルサリムに限るとか申すのは、どちらも偏頗の妄信たることを免れません。が今までは人人の心が幼稚で、殊に罪の爲に智も餘り開けなかつたから、こんな議論も有て無益の分爭に互ひに心を苦しめてゐたのであるが、何時までもこんな具合で立續くべき者ではない、『時が來る一回りツばな、時が來る、時とは、衆民の心靈上革新の時でありまして、其はハリストス救世主の傳敎と行爲と殊に贖罪の死と復活を以て恩寵の國を地上に建て給

ふ時であります。上帝は全世界億兆の父である。我々は同胞兄弟で、共に此唯一の父に事へまつるべき者であります。それが何も何處の山でなくては ならぬ、何處の國の何といふ宮でなくては祈禱の效能がないなどといふ樣な道理のあるべき者でない。今にもハリストス教以外の宗教では、否宗教といふ名もつけられない手合で、甚だしきは風俗壞亂の罪に問はるゝ樣な流儀で、奇怪な神佛を傳ふる組合では、妄りに妄說を流布して『何處其處の何といふ宮に行て願をかくればとの樣な病氣でも直に痊る』とか『何々大明神を拜むにはどうでも何村の何神社に行かなくてはお聽容がない』とかいふ樣ななか〳〵やかましいことをいふ流儀もありますが、此は直に其上帝が眞の上帝でないといふことを顯はす者です。只一ケ所に居て其外では誰が何を祈ッてゐても、更に届かず、たれは餘り遠方で拜んだから聞えなかッたといふ樣なことでは、吾々人間も同じことで、とても神の神たる甲斐はありますまい。所に眞の上帝は決してそんな者ではありません、

なぜなれば『上帝ハ神ナリ、彼ヲ拜スル者ハ神ヲ以テ眞ヲ以テ拜スベシ』――『上帝は神である、故に之を拜む者も、亦神と眞を以て拜むべきである。』上帝が神であるとは、全く何らの形もなく、姿もなく、實に物質の外なる――とても人智では測ることのできない――不思議の本性であることを申すのであります（そこで上帝は、場所や時間に限られずして何處にも臨在になることができるのであります、）光も昔しから我らの教會でも、此樣な神靈のことを或は繪像を以て、或は文章を以て、象ることもありますが、此は聖なる啓示に基づきて、とても全くは分らない無形のことを凡人に少しでも分り易くする爲に、わづかに象ッたまでのことで、とても形のない者の本性を見て、窮めるといふことはできる筈の者ではありません。そうすると我らはどうして上帝に關係することができるかと申すに、其は上帝の無形なる如くに、我らにも肉體の主たる者は無形であります、即ち靈魂は我が所有ながら目に見ることができません。此靈魂は人間が上帝に關係する爲に特

別に上帝から賜はッた者であります。そこで我らは異教の人が只肉體を滿足させる爲に肉體の神を作ッて拜むといふ樣な流儀に反對して、其本性神なる上帝を拜むには、又神なる靈魂を以てせねばなりません。抑我らの神とは俗にいふ精神又は、靈魂とまるで別な者では ない 然ども、靈魂の中で一ばん高等な部分で、即ち人の生命の最上に位する主人公であります。乃ち主は「神ハ生カス者ナリ、肉ハ益ナシ……」と仰せられ、聖使徒は『爾等ハ斯ク無知ナルカ、神ヲ以テ始メテ、今肉ヲ以テ終ルカ』と戒めてをります（イオアン六の六十三、ガラテヤ三の三、其他參考。）。然らば至高き上帝に關係し、其を拜み其につかふるには、我らも此高き神を以てするのは當然のことでしやう。然るに世の中にはせッかく眞の上帝を知て其についたと曰ひながら、只肉體を以ての禮拜と形ばかりの敬虔を裝ふて、一向神靈についてをる高尙なる思想と潔白なる感情を以てしない流儀のあるのは、固より心得違ひでございます。故に聖使徒パエルは自ら神を以て上帝に事へつゝ（ローマ書一の九）諸信者にも、上帝を拜むには特に注意して『神を以て祈れよ』と訓へてをります（エフエス書六の十八）。

此れまでで、神なる上帝に事ふるには、我らも神を以てして、肉情を以てしてはならぬといふことは、皆さんお分りになッたでしやうが、まだ、も一つ眞といふ者が必要でございます。神はいかにも大切な者で、上帝の神には勿論僞りのある筈もないが、人間の神には時として僞りがあります。天使は、人間よりはるか尊い神でありました、それでさへ彼らの一部分は墮落して不淨の神即ち惡魔となッたのは、外ではない、眞を缺いだからであります。上帝の本性は神である通りに又上帝の固有の聖德は眞であります、そこで上帝に造られた物は、どうでも上帝の聖德に倣ひ、上帝の聖意に從ふて誠を守らなければならぬ。然るにかの天使の一部分は自分の自由を我儘に用ひて、自分の主に從ふといふ誠をなくしたが爲に淺猿くも虛言者となり、詐欺者となッたのであります。されば我ら人間に於

ては、尤もよく氣を付けて眞をなくしない樣に勉めなくてはなりません。そも舊約の時分には、まだ救世主がお降りにならなかッたから、其奉神禮は、多く將來のことを象る影の樣な者でありました（エッレイ十の一）。そこで衆民の中には、否學士敎導者と呼ばるゝ者の中にも、只形の儀式ばかりに重きを置て、まるで內の大切な本意を失ふてしまふた樣な者もたくさんありました。外面にあらはるゝ儀式は、心の眞のあらはれとしてこそ大切な者で、若此の內の眞がなかッたならば、何の役に立つ者でもない。そこにもはや新約になッて、彼將來の影ではない、恩寵の本體たる救世主ハリストスが既にお降りになッた以上は、これまでの儀式ばかりの法律は要なき者となるのは當然であります。故に救世主は、時至ればこれまでの樣に場所に限られずして どこの民でも神を以て上帝を拜む樣になると共に、將來の影なる舊き法式は廢れて、人人は只眞を以て上帝を拜む樣になるといふことを仰せられたのです。殊に只形の儀式ばかりに拘泥して內に一片の丹心もない假裝的祈禱は宜しくないといふことをお諭しになッたのです。獨りイウデヤ人とサマリヤ人ばかりではない、ハリストス敎の行はれない異邦の祈禱は、多く此外儀ばかりの騷ぎであることは、隨分今頃でも世間に見ることができましやう。乃ち其稍上等なのは鐘や太鼓ではやし立てゝ、何とも分らぬことを幾遍も繰返したり、其下等なのになると、其國の語さへ知らぬ間違だらけの歌を歌ひ變な手付をして踊るなどの儀式でありません。聖地靈跡の巡拜なども、心の誠が溢れて熱愛の餘りになすことであれば、無論善いことにちがひない。けれども心に何の誠なき只好奇や自慢の爲にするならば、たとひ千萬圓を費して幾千里を遠しとせずして態〳〵イユルサリムまで出掛けたからとて、何の御利益を受るよもできますまい。或敎會でもてはやす某所の靈泉も、大なる信仰ある人の爲には何かの御利益もありましやうが、胸中一寸の眞もなき者を痊すの效能はありますまい。

斯く申すと、『基督正教會でも、隨分いろ〳〵な儀式をするではないか』と突掛る方も ありましやうから、念の爲皆さんの誤解がない樣に願ふて申上ましやう。即ち新約の時代に在て、我が正教會に、方々の聖堂又は祈禱室に行はれてをる奉神禮のことであります。或一派の人は、徒らに前に申した聖書の文字に拘泥して『祈禱は、只心ばかりですればよい、法式などはさッぱり要ない』と云て、甚しきは我が正教の嚴かなる奉神禮を謗る樣な流儀もないではないが、此は大きな心得違ひであります、そういふ方はまだ神と眞といふ意味が分らぬのでありましやう。そも今に正教會に行はるゝ公祈禱の法式は、皆内に神と眞を以て上帝に事ふる其誠の表れであります。我が教會は、決して只儀式に依てのみ救はるゝとは教へない、けれども故らに良心をまげて『心さへあればよい、形はどうでもよい』と云て、上帝の聖意に出た正當の法式まで排斥るのは、まだ誠が足らぬだらうと思ひます。誠が内に在れば必ず外に顯はるゝのは當然の現象で、内外相應ふてこそ甫めて眞の誠なる所以を全うせらるゝ道理でありましやう。何も外儀が趣意ではない、其精神は心にあるといふことは、我々も主の教に依て之を知てをります、けれども主は人人の信仰と善行の進歩に助ける爲に、心の表現なる外儀については、決して之を斥け給はぬのみならず、自ら行ひ給ひ、且つ御門徒がたに命ぜられ（たとへば、ルカ廿二の十九、其他）、又其門徒らの相續者を以て教會に於て定められてある ことは、聖書と聖傳に於て詳かであります（たとへば、十字架を畫くことは使徒の規程八卷十二章に見え、又公祈禱に燈明を用ることは使徒規則三の七十七、其他皆一一據所があります）。

斯樣に心の禮拜の大切なことを悟り、且つ其が眞の顯れなる外形をもおろそかにせず、一口にいはば内外相應ひ、名實違はない者は、是こそ『眞の禮拜者』と名けることができる。此樣な禮拜者が神と眞を以て父を拜む時は』必ず『來る』否主のお言の通り、『時ハ來ル、今ハ是ナリ』――其『今はもはや其時である』。なぜなれば救世主は、もはやイウデヤから始まッて救ひの福音を傳へ給ひ、今やサマ

リヤの町にまで多少の信者があらはれて、彼らが神靈を以ての集會なる上帝の國は茲に其芽を出しつゝ成長をはじめたからである。其は又如何してであるかと質せば、又主のお言のとほり『蓋シ父ハ是ノ如ク彼ヲ拜スル者ヲ覓ム』、『父は此樣にして拜む者を求めたまふ』からである。天に在す我らの父は、自らが神と眞であるから其子なる人人にも亦靈魂と眞心を以て光榮と感謝と伏拜を上つることを其聖意に喜び給ふからであります。固より此樣な禮拜が、只上帝に必要なのでお求めになるのではない、人の救ひの爲に必要なからである、上帝が人を愛する愛の聖意から出たことであります。故に我ら罪人からいへば、たとへ上帝がお求めにならぬとも、我らから強てお願ひ申すべきであります。それに萬事缺めなく幸福に滿給ふ上帝から先づお求めになるとは、果して何らの御慈悲深いことでしやうか。是ぞ誠に父の父たる所以でしやう。而して我ら罪人がかくまでも惠み深き上帝を父と呼ぶことができて『上帝の子』たる名譽の稱號をうけるのには、勿論弱り果た我ら人間の力では合はぬといふことは、もはや最前からの物語をよく氣を附けて讀んだお方は大ていお分りになりましやうが、余はこゝに聖使徒パエルの言を引て此筆を止めましやう。『凡ソ上帝ノ神ニ導カル、者ハ上帝ノ子ナレバナリ蓋シ爾等ハ奴タルノ神仍懼レヲ懷ク者ヲ受ケタルニ非ズ、乃チ子タルノ神、我等ガ之ニ由リテ「アウワ」父ヨト呼ブ者ヲ受ケタリ。此ノ神自ラ我等ノ神ト偕ニ我等ガ上帝ノ子タルヲ證ス。』――『凡そ上帝の神に導かるゝ者は上帝の子である、其は汝らは奴たるの神、仍懼れを懷く者を、受けたのではない、即ち子たるの神、我らが是に依て「アウワ」父と呼ぶ者を、受けたのであります』（ローマ書八の十四、―十六）。此に「アウワ」と申すのは、イウデヤ即ち古のエウレイの國の語で、我が國の『父』と云ふ事であります。眞の上帝なる天の父を忘れずに、善く其信仰を守ってゐたのは、ユウレイの人々でありましたから、而して我らが上帝を父と悟り、之を拜むことは、至ッて大切の眞理ですから、廣く皆樣の御注意

を茲に向けられる爲に、聖使徒は茲に彼の國の原語を引たのであります。

終に臨んで、一言申添へましやう、其は『我らは如何して上帝を拜む必要があるか、又之を拜んで何の利益があるか』と云ふお疑ひに對してです。抑人間として萬物の至上者なる上帝を拜むのは、我らに生れながら賦與せられた天性で、之を疑ふのは丁度『我らは如何して親に孝行する必要があるか』と云ふ樣な者です。我らの生みの親に孝敬するの當然なるを悟れる人は、又我らの造物主たり大恩者たる天の父を尊んで拜むのは當然のことです。而して之を拜んで、如何いふ利益があるかと云ふことは、既に前々申述べた中にも顯はれてゐますが『永遠ノ生命ニ湧ク水ノ泉』即ち我らの靈魂に滿足を與ふる所の上帝聖神の恩寵を戴くことであります。少しく細かに申せば、〔一〕最も敬ふべき者を敬ひ、最も大切な義務を盡すに依て、良心の滿足です、〔二〕此上もない惠み深き愛の上帝に役事るとに因て、大なる佑けを受け、本心の平安を得ることです、〔三〕睿智なる上帝の攝理を信ずるに因て、此世の種々な苦みを堪へ、忍耐と勇毅を以て、惡魔を防ぎ、浮世の誘ひに克つことです。〔四〕終に最も大なる結局の利益は、我らが身體は死ぬるとも、靈魂は永遠かぎりなき生命を得られると、即ち天國に救はるゝことであります。

よし此だけの利益がないとしても、又何らの利益もないとしても、我らは受造物として、己が造主たる上帝に敬拜の義務を免れることは、どうしても出來ません。其は至上至尊なる畏るべき上帝の命令であります、此最初に掲げました

『主爾ノ上帝ヲ拜セヨ、獨リ彼ノミニ事ヘヨ』

との命令、即ち上帝の法律は各人の良心に銘せられてあります。所で此上に澤山の利益があるのです、前に申述ましたのは、ほんの一部分です。どうか皆さん此いと尊い上帝を敬ひなされて澤山の御利益をお受けなさい。世の中には偶像邪神を拜んでさへ色々な御利益があると信じてをる人が澤山あります。況てや眞の

を茲に向けられる爲に、聖徒は茲に彼の國の原語を引たのであります。

終に臨んで、一言申添へましやう、其は『我らは如何して上帝を拜む必要があるか、又之を拜んで何の利益があるか』と云ふお疑ひに對してです。抑人間として萬物の至上者なる上帝を拜むのは、我らに生れながら賦與せられた天性で、之を疑ふのは丁度『我らは如何して親に孝行する必要があるか』と云ふ樣な者です。我らの生みの親に孝敬するの當然なるを悟れる人は、又我らの造物主たり大恩者たる天の父を尊んで拜むのは當然のことです。而して之を拜んで、如何いふ利益があるかと云ふことは、既に前々申述べた中にも顯はれてゐますが『永遠ノ生命ニ湧ク水ノ泉』即ち我らの靈魂に滿足を與ふる所の上帝聖神の恩寵を戴くことであります。少しく細かに申せば、〔一〕最も敬ふべき者を敬ひ、最も大切な義務を盡すに依て、良心の滿足です、〔二〕此上もない惠み深き愛の上帝に役事るとに因て、大なる佑けを受け、本心の平安を得ることです、〔三〕睿智なる上帝の攝理を信ずるに因て、此世の種々な苦み悲みに堪へ、忍耐と勇毅を以て、惡魔を防ぎ、浮世の誘ひに克つことです。〔四〕終に最も大なる結局の利益は、我らが身體は死ぬるとも、靈魂は永遠かぎりなき生命を得られると、即ち天國に救はるゝことであります。

よし此だけの利益がないとしても、又何らの利益もないとしても、我らは受造物として、己が造主たる上帝に敬拜の義務を免れることは、どうしても出來ません。其は至上至尊なる畏るべき上帝の命令であります、此最初に掲げました

『主爾ノ上帝ヲ拜セヨ、獨リ彼ノミニ事ヘヨ』

との命令、即ち上帝の法律は各人の良心に銘せられてあります。所で此上に澤山の利益があるのです、前に申述ましたのは、ほんの一部分です。どうか皆さん此いと尊い上帝を敬ひなされて澤山の御利益をお受けなさい。世の中には偶像邪神を拜んでさへ、色々な御利益があると信じてをる人が澤山あります。況てや眞の

上帝全能者を拜んで何の御利益もないと云ふ理がありましやうか。且つ其偶像邪神の御蔭と見えるとも、實は皆眞の上帝の御蔭です。大仁慈限りなき上帝は未信者にまで憐みを垂れておいでなさるのです。されば我らは何より早く天の父を敬ひ全能の上帝を拜む樣に勸めるのは、人生の最大急務、最上の大倫、此上なき重要の本分では有ませんか。

畢

264
200

大正三年五月十二日印刷
大正三年五月十三日發行

定價金三錢

東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地
發行兼編輯人　正教本會編輯所
東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷者　小西幸吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷所　日本印刷株式會社
東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地
發行所　正教會事務所

造物主略話　全一冊……定價金三錢、郵稅二錢。
教會須知全一冊　又は一枚刷　本會事務所に御申込あれば無代價で發送す

道理書目

○版第三 永遠の生命 全一冊……金三錢

○版第二 先祖の神 全一冊……金二錢

○版第五 正教の勸め 全……金三錢

○版第四 活ける上帝の子 全……金四錢

○眞の安心 全……金三錢

○基督教の辯護者 全……金六錢

○元祖アダム及びエワの傳 繪入……金五錢

○列祖エノフの話……金四錢

○イリヤポリタイ書花 大致命女ワルワラの傳 繪入……金八錢

○大致命女聖エカテリナの傳 繪入……金十一錢

郵稅は各二錢宛を要す